



TITLE:

鹽場の泰州學派

AUTHOR(S):

森, 紀子

CITATION:

森, 紀子. 鹽場の泰州學派. 東方學報 1986, 58: 525-554

ISSUE DATE:

1986-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66651>

RIGHT:

鹽場の泰州學派

森 紀 子

はじめに

過安豐場詩 安豐場を過ぐる詩

蒲青露白水潜潜 蒲青く露白くして水潜々たり

斜日春風動客懷 斜日^{ゆづひ}どき春風ふき客の懷^{おも}ひを動かす

若道安豐民最賤 若し安豐は民最も賤しと道はば

布衣亦有王心齋 布衣にまたあり王心齋

我自攜琴東海濱 我自から琴を携へいく東海の濱

相逢半是賣鹽人 相逢ふは半ばこれ鹽を賣るの人

論詩近有吳生好 詩を論ずれば近きに吳生の好きあり

三十場中一隱淪 三十場中一隱淪あり

これは清初、三原人孫枝蔚が、友人吳嘉紀の住む泰州安豐場を訪れた時の詩である。詩中に吳生とあるのは吳嘉紀のこと。^①吳氏は明初から安豐場に住みついている一族である。平生、人と交わることの少い詩人を、鹽場に訪なった時、孫の感懷にい

やおうなく、浮んできたのは布衣王心齋であった。王心齋の名は、鹽場のイメージと切り離すことはできないのである。

「安豐は民最も賤し。」の一句は、當時のごく一般的な通念であつたらう。普通の知識人にとって、鹽場とはやはり、いささか特殊な雰囲気をもったところであつたはずである。吳嘉紀の傳を書いた汪懋麟は、安豐場を次のように形容する。「地は濱海でアルカリ性の不毛の地である。住人は煎鹽を業としている。性來、剽悍で格闘を好む。凶歳とか、天下が物騒な時になると、たちまち興起して盗人となる。普段無事な時でも、口論に火がつくと人を殺してしまう。」⁽²⁾あるいは、「竈戸謠」⁽³⁾（作者不明）の冒頭にも「昔の竈戸は罪人なり。今の竈戸は頑民なり。」と歌っているのである。

かような鹽場を舞臺に形成された、泰州學派及びその始祖王心齋に關しては、すでに思想史において、王陽明—泰州學派：李卓吾に至る「良知の一人だち」の系譜として、その内面的な展開が明白に位置づけられている。⁽⁴⁾あるいは、その格物説の展開に注目し、良知（王陽明）—身（王心齋）—家（何心隱）という圖式も考えられた。⁽⁵⁾「王學左派」⁽⁶⁾という呼稱は、ほとんど泰州學派のものであつたし、「資本主義萌芽」の上部構造として、その欲望肯定への傾斜が評價された。⁽⁷⁾そして、いづれにおいても、その歴史的背景として「銀經濟、商品經濟の活潑化」が指摘されるのが常であつた。

ところで、王心齋が王龍溪とともに、二王と稱される王陽明門下の高弟であつたことは、當時から有名なことであつた。しかし、黃宗羲は、その『明儒學案』において、泰州學派を「泰州王門」とせず、單に「泰州學案」として異例のあつかいをしてゐることも、つとに指摘されている。⁽⁸⁾黃宗羲が、王門と一線を畫すに至つたどのような獨自性を泰州學派に見出したのか、思想史の上で興味深い問題であるが、本稿では、思想的アプローチはひとまずおき、王心齋が鹽場出身者である點に注目し、王心齋と、その直接の弟子達の社會的あり方⁽⁹⁾につき、當時の鹽場の事情とからめて考察していきたい。

一 安豐場の王氏

安豐場は、兩淮都轉運鹽使司の泰州分司に所屬する中十場（富安場、東臺場、梁垛場、安豐場、何垛場、丁溪場、拼茶場、草堰場、角斜場、小海場）の一場である。そして、これら十カ所の鹽場をぬうように、蜿蜒とのびている防波堤が范公隄である。

宋代、范仲淹がその修工に關與したことから、この名のある范公隄は、中十場のみならず、南は通州分司所屬の呂四場から、北は鹽城縣をぬけ、淮安分司所屬の廟灣場・莞瀆場にまで達する規模をもつ。「隄の東は竈に屬し、隄の西は民に屬す。」⁽¹⁰⁾とあるように、この范公隄を境に、竈籍に編入された竈戸（製鹽業者）と、民籍の民戸とが、その居住區を判然と分たれていたのである。各場ともおおむね、南北にのびる范公隄の西側、すなわち防波堤に守られた内陸側に市街地があり、鹽課司、鹽大使署等の官衙や、寺廟がたちならぶ。そして范公隄の東側、海に直面した一帯が製鹽現場であり、竈戸の家屋が散在し、竈戸の組織である團の編成もここにみられるのである。

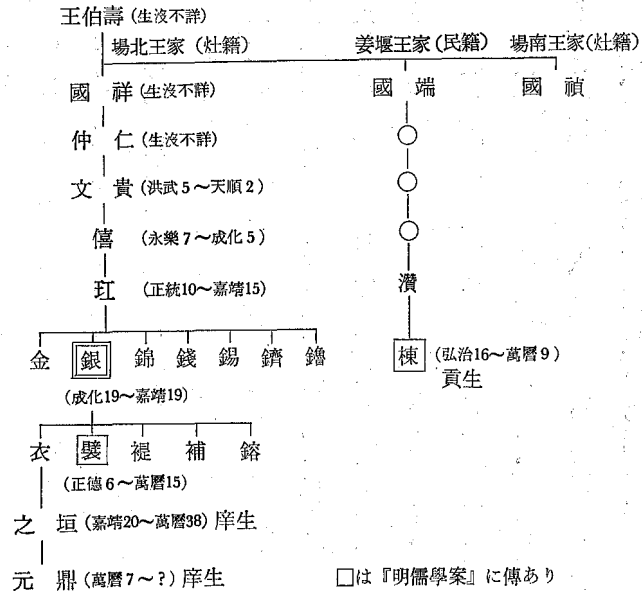
ただし、安豐場では、この范公隄の兩側に民居が密集し、甌石のしきつめられたこの堤防の南北七里は中街と呼ばれ、そのまま安豐場をつらぬく街道と化している。王心齋の故宅は、この中街の東、安豐場の東北隅に位置している。⁽¹¹⁾さらに東の方、月塘灣の北には、王心齋及びその父、兄弟、子等十三人の墓所がある。⁽¹²⁾

そもそも王氏の系譜は、始祖伯壽が、蘇州より、淮南安豐場のこの地に遷徙した國初にさかのぼる。⁽¹³⁾王氏が蘇州より鹽場に遷徙した間の事情は定かでない。しかし、年代的にみて、張士誠の政權の崩壊、蘇州城の落城と無關係ではありえない。

竈戸は率むね呉の民多し。相傳うるに、張士誠、久しく王師に抗う。明祖、その負固を怒り、而して惡しみをその民に遷し、これを濱海に擯て、世々熬波の役に服せしめ、以てこれを困辱す。⁽¹⁴⁾

朱元璋が、張士誠への報復から、呉の民を沿海に遷し、竈戸におとしたというこの傳承は、また、王氏の遷居の事情を物語

王氏系圖



るものかもしれぬ。

王伯壽には、國祥、國端、國禎の三子があった。長子の王國祥は、安豐場の北盛團に竈籍をもつて編入され、以後彼の系統は、場北王家と稱された。王心齋はこの後裔である。次子の王國端は、姜堰鎮にあって民籍に編入。姜堰王家と稱される彼の後裔には、王心齋とともに泰州學派形成の核となった王棟(王一庵)⁽¹⁵⁾がいる。三子の王國禎は、安豐場南盛團に居住し、やはり竈籍に編入。場南王家である。

ここに北盛團、南盛團とあるのは、鹽場特有の組織である。州縣の民戸に里甲があるように、鹽場では團によって竈戸を組織し、團煎の基礎とした。⁽¹⁶⁾のちに團煎が崩壊し、實行されなくなつてからも、團の名のみは地名として残っている。ちなみに地志には、安豐場の團として、北勝團、南豐團、新豐團、王家團の名がみられる。⁽¹⁷⁾

王孝女、安豐人。父國祥は百夫長なり。蚤に歿す。兄仲仁は寡に應じて南征す。家に次丁無し。女、貞を守り以て寡母を養う。聘を議する者あり。輒ち辭して曰く、父死し、兄戍す。母女相依りて命を爲し、嫁するを願はざるなりと。年七十餘にして卒す。⁽¹⁸⁾

未婚のまま母を養つたことにより、孝女と稱された王國祥の娘の記事によれば、國祥は百夫長であつたという。百夫長とは、明初、未だ鹽課司の體裁が整わない時期、鹽場において鹽課を徵收すべく設けられた役職である。

有明國初、各場の鹽課は皆管勾を以てこれを主らしむ。⁽¹⁹⁾洪武三年、勾管を罷め、老軍を以て百夫長となし、煎を催し、課

を脅せしむ。十四年、老軍を革去す。就ち本場竈戸内において丁糧相應しき者を選び永く充つ。十八年定めて一年一換とす。二十五年四月、始めて鹽課司を設く。每場大使、副使各一人。銅條の印を鑄しこれに給す。⁽¹⁹⁾

王國祥の子が王仲仁である。彼もやはり百夫長であったが、前述の記事にもあったように、後に兵役にあてられ、四川に配屬させられる。すなわち、洪武初年、邊境警備の軍戸を補充するために、「垛集」という方法がとられた。民戸三戸を集めて垛集の一單位とし、その中の一戸を正戸とし、一丁を選抜して軍役にあて、他の二戸を貼戸として正戸の補助としたものである。⁽²⁰⁾王氏は鄧、滕の二姓と合して、四川寧藩衛に永戍させられたのである。王仲仁はこの南征の折に戦死した。後に鄧姓は戸絶し、滕姓は逃亡してしまい、王姓のみが残ったという。⁽²¹⁾

一般に竈戸といえ、それだけでその過重な力役、劣悪な生活條件が想起される。百夫長に任ぜられた王氏は、「丁糧相應しき者」であったとしても、その督徴の責任は重いものであったろう。そこへもってきて、さらに軍役がかけられてきたのであるから、この時の王氏の負擔は並々ならぬものといわざるをえない。なにか特殊な事情が、そこにからんでいるようである。

洪武中、明朝體制の確立をめざし、朱元璋によって執拗にくり返されたのが、江南の富民、地主層に對する彈壓であった。とりわけ浙東、浙西地域では、多數の富民が籍没の憂目にあったのであるが、ここ淮南の地も例外ではなかった。興化縣と泰州の境界一帯において、田糧を欺隱したということで、民三百戸が遷徙され、また、鹽徒とみなされた蔡玄等五百戸が良郷、涿州（順天府）に徙された。そのために、この一帯の田は無主となると記録される事件だったのである。⁽²²⁾そして安豐場においても、吳嘉紀の祖吳汝陽は、この「蔡鹽法を權るの事」に株連して、雲南烏撒衛に配されている。⁽²³⁾いづれも洪武十七年ごろのできごとと推測される。

ところで、王國祥、王仲仁と二代にわたって百夫長になっていることが、「本場竈戸内において丁糧相應しき者を選び永く充つ。」という前述の記事に該當するのであれば、それは洪武十四年から洪武十七年にかけてのことである。洪武十八年から、百夫長は一年一換になるからである。とすれば、王仲仁が四川に永戍させられた時期と、蔡玄等五百戸の遷徙、吳汝陽の

雲南への流配の時期はほぼ重なるとみてよいであろう。王氏の四川への永戍にも、懲罰的な意味がこめられていたに違いない。王仲仁の長子が文貴である。「世系源流截略」によれば、彼は商を業としていたという。鹽の自煎自販ということであろう。彼はそれなりの經濟力をつけたとみえ、安豐場に廣容石橋を捐建している²⁴。彼以後も、この橋の修理改築には、彼の長子である惇(字公美)と從子王尙端が盡力しており、その間のことは、布政使林正茂の「安豐廣容橋記」に詳しい。

正統十四年(一四四九年)東淘(安豐場の別名の善士王文貴、徒杠の圯壞するを覩る。これに由り廣く石材を市い、小を易えて大となし、下に闕門を構へ上は欄楯もて衛る。いはゆる輿梁なるものこれのみ。殊に昔の陋なるに異なるなり。いかんせん、歳久しくして頽す。王氏公美、又從りてこれを修む。時に成化六年(一四七〇年)なり。今に迄り甫めて四十餘年。復たび傾圯するを見る。義官王尙端、衆とともに謀りて曰く、この橋なんぞ速やかに壞ると。……ここに己が貲を捐し、これを鼎新す。制度の工、規模の壯、俱に舊に加う。上流には則ち増すに石閘を以てし、下流には則ち鑿つに直渠を以てす。

この記事から推すに、王尙端の工事は正徳七年前後のことであろう²⁵。

各鹽場には、鹽の運搬に深くかわる運河が網の目のように走っている。當然、橋梁の建設も、地域において重要な意味をもってくるわけであるが、その建設の擔い手はどのような人であつたろう。康熙『中十場誌』卷二疆域に記載された各場の橋のうち、その修建者の名が明らかなものを一瞥するに、明一代は全て竈民某とある。場内の有力竈戸の存在を示すものといえよう。ところが、順治、康熙と清朝に入ってから、徽商某と變つてくるのである(もちろん清朝に入ってからでも、安豐場盈寧橋のように、義竈の捐資によるという例はまみられる)。

明末、萬曆四十五年の綱法の成立と、兩淮における鹽課の折銀化は、鹽の專賣制度の構造を大きくかえるものであつた。王朝權力による鹽場の直接管理の建前は、名實共に崩れ、特權商人の運營にかかる商專賣が確立したのである。これ以後商業資本の鹽場への進出はめざましく、(もちろん、高利貸としての商業資本の鹽場への流入はそれ以前から活潑であつた。)積極的に鹽の生産にも

關與していくのである。このように商人の經濟力が直接鹽場を支配していく過程が、橋の建設といったものにまで反映されているわけで、なかなか興味深い。ちなみに、十場の一つ、東臺場は、乾隆三十三年に縣となるが、ここには養和堂という徽商の會館が乾隆二年から建てられている。⁽²⁶⁾

王僖には四子があつた。第三子の王珏(字紀芳・號守庵)が王心齋の父である。この父親に關しては、「少くして任俠を喜び、中年更に善を樂しみて倦まず。古樸にして坦夷なり。」⁽²⁷⁾とか、「父は豪放にして娼家に遊ぶ。良、^{ほんど}幾諫むること百端、終に聽かず。」⁽²⁸⁾といったように、その豪放かつ游蕩三昧の人柄を記すのみで、家業にわたるものがない。ついでにいえば、この游蕩を好む性癖は、王心齋の族弟であり、かつ泰州學派の中心人物であつた王棟にもみられたことであつた。

李氏は安豐王棟の妻なり。棟、家貧し。氏、その衣及び釵環等を鬻ぎ、以て宿逋を償う。……初め棟、嬉遊を好み、博奕を喜ぶ。花晨月夜の毎に酒を酌み茶を煎す。⁽²⁹⁾

もう少しこれを敷衍していふならば、鹽場一帯は、商人が集中するところである。とりわけ成化年間よりは、商人が、本場において餘鹽を收買することが公けに許されたのであるから、現銀を携えた商人の、鹽場への出入は一層頻繁であつたろう。このために、儉約を旨とする農村とはまた違つた氣風が鹽場には、培われていたのである。

各場の竈は、煮海の利を食ぼる。恒業ありて恒産なく、逸を好み、勞を惡む。貿易輕からざれば、その郷を去り、游蕩酒食を以て相徵逐す。闔閭、通衢は茶坊、酒肆、浴滷多し。⁽³⁰⁾……

あるいは、霍韜もまた兩淮の氣風を次のようにいふ。

兩淮、通(州)・泰(州)・寶應の州縣にありては、民は農田を厭い、惟だ鹽利を射す。故に山陽の民は、十五以上は俱に武勇を習い、氣も復た悍頑。死刑をも忌はず。⁽³¹⁾……

ここには、時として官兵と一戰交えることすら辭さない、強力な私鹽の集團を形成しうる、荒々しい鹽場の氣風がよく出てゐる。

さすがに隆慶、萬曆以前には、まだ淳朴な風が残っていたということではあるが、明末にもなると、この格闘を好む氣風と、奢侈の習慣には一層拍車がかかり、草堰場と丁溪場の境界では、毎年、年始になると兩場の子供が、互いにののしり、毆打しあい、それに父兄が加わって大亂闘となり、家屋を焚焼したり、殺人沙汰にまで發展するのが常であったという。あるいは「富安の馬、梁梁の樓」という俗謡が生れるほど、富安場では馬に金をかけ、華靡を好み、梁梁場では競って美邸を構えたという。⁽³²⁾ 安豊場もまた「安豊の鹽はその色青白、日久しくして甜美なり。口に入るに鹵苦の味なし。而して質、較重し。故に商家多く聚まる。」⁽³³⁾と、質のいい鹽を産していたがために、商人がよく集まっていたのである。現金の流入とともに、その酒食游蕩を好む風も、決して他場に劣るものではなかったろう。以上、安豊場の王氏の系譜を簡単に述べた。

二 王心齋の軌跡

王心齋の生涯については「年譜」⁽³⁴⁾があるし、彼の思想形成とのからみで、すでに紹介されている。ここではその社會的な面に注目してみたい。

王心齋、本名銀（のちに王陽明によって良と改名された。易の艮卦は止まるの意味。「止於至善」に通ず）。字汝止。成化十九年（一四八三年）王珏の第二子として生れる。弘治二年、七歳の時、鄉塾で讀書を始めるが、家が貧しいため、學業を續けることができず、十一歳で家業を手傳うこととなった。弘治十四年、十九歳のおり、父の命をうけ山東へ商遊している。山東へはこの後にも二度（弘治十八年、正徳二年）でかけているが、李二曲はこれを販鹽のためとしている。いうまでもなく私鹽である。⁽³⁵⁾

當時、私的に販鹽することが全面的に禁止されているわけではなかった。私鹽の取締りは百斤以上であって、「その近海近場の窮軍、貧民の、以て肩挑し米に易える者あるも、必ずしも具奏せず」と『會典』⁽³⁶⁾にもあるように、日々の糧を得る程度の賣買は公認されていた。竈戸の生活を支えるため支給されるはずになっていた工本米、工本鈔が空手形に近い現状では、竈戸

が私的に販鹽するということは、むしろ當然という認識があったのである。そしてこれを突破口に、百斤に止まらず相當數の鹽が流通したであろうことも、容易に想像できるのである。

ところで、山東もまた都轉運鹽使司がおかれ、十九カ所の鹽場をもつ產鹽地である。淮南から山東へ販鹽に行くことに、どのようなメリットがあったのであろう。この疑問に關連し、注意しなければならないのは、兩淮鹽に對しては、その開中を願う商人が多かったのに比して、山東鹽の開中には商人が集まらなかったということである。このため、かなり早い時期から、山東鹽では客商の開中を行わず、本地において鹽課の折色を行っていたのである。

すなわち、宣德五年（一四三〇年）には、山東の信陽等の鹽場で、鹽課二大引（二大引＝四百斤）につき、綿布一疋を折色とし、登州府に運ばせ、遼東の軍用にあてている。正統十年（一四四五年）には官臺場もその例にならい折布ということになる。さらに弘治十二年（一四九九年）には、その鹽が苦く黒いたため開中に應じる商人がいまいことから、濰洛等の三鹽場において、一大引ごとに銀一錢五分を徴する折銀が始まった。正德三年（一五〇八年）になると、折布していた八カ所の鹽場も新たに折銀化したのである。⁽⁹⁷⁾兩淮の折銀化が萬曆四十五年（一六一七年）とされているのとひき比べ、いかにその折銀化が早いかわかるであろう。山東鹽が、かく不人氣であったのは、品質の低さもさることながら、會通河から遠いという、地理的條件の悪さによるところが大きい。かかる點に乗じて、淮南鹽が越境販賣されたと考えることはできよう。

また、王心齋が山東に商遊した年は、泰州において天災が記録されている年でもある。山東へ行く前年、弘治十三年には大水があり、弘治十四年の春から十六年にかけては旱魃があった。二度目の山東行きの年、弘治十八年も旱魃の年であった。⁽⁹⁸⁾かかる困難に直面しては、積極的に販路を求めねばならぬ經濟的要請も強かったであろう。ともあれ、王心齋は經營の才が豊かであったらしい。彼が家業を經理するようになってから、王家は日に裕福になったと「年譜」には記されている。

この山東行は、彼の思想形成においても重要な轉期となった。正德二年、山東に遊び、孔子廟に謁した彼は「夫子も亦た人なり。我も亦人なり。」と發奮し、道を志すに至ったのである。これ以後「孝經」「論語」「大學」を常に袖中に入れ、人に逢

えばその意味を質するという獨學を始めた。二十五歳のことである。

あくる正徳三年（一五〇八年）も泰州は旱魃であった。

守菴公（父王珪）戸役を以て、早起し官家に赴かんとすること方に急、冷水を取り、面を盥う。會^{たま}たま先生（心齋）これを見、深く勞に服するを得ざるを以て痛となし、遂に身を以て代役せんことを請う。⁽³⁹⁾

戸役に従事しようとする父の勞を見て、みづから代って服役したという王心齋の孝行を語るエピソードであるが、この戸役とはどんな内容のものであったろうか。

竈戸の役負擔はなかなか複雑である。「竈戸はその戸籍そのものが一種の役たることを表示してをり、製鹽事業に従事すること自體が一種の力役に服することに外ならなかつた。⁽⁴⁰⁾」といわれるように、鹽課、貢課⁽⁴¹⁾を全うするため團煎に従事するのが基本であるが、股實の竈戸は排年の總催に、それにつぐものも、輪年の頭目にあてられる。あたかも、里甲における里長、甲首に匹敵するものであり、鹽課催徴の事務にあたるわけである。

また洪武の規定では、各場とも、十戸につき一丁を（先年あてられた戸は除く）工脚にあてる。具體的には鹽場において引鹽を扛^か擡ぐこと、倉庫を看守することである。⁽⁴²⁾やや下るが、嘉靖三十九年、州縣の均徭に含まれるものとして、各場に割りつけられた工脚の名目として次の七つがあがっている。

綱甲	解運貢鹽者	經紀	估直證募者	阜頭	僱募商船者	地主	出地屯鹽者
脚頭	統率脚夫者	店戶	邸寓商旅者	堆頭	堆垛商鹽者		

いづれも一年一換である。⁽⁴³⁾

さらに田産をもつ竈戸は、鹽課の他に田糧も負擔する。例えば、角斜場のように東西半里にすぎぬ小さな鹽場では、居民も寥々として、わずかに百餘家があるのみ。その富室、巨室はみな村落に散居しているといわれるように、⁽⁴⁴⁾竈戸であっても必ずしも鹽場に居住しているとは限らない。その場合、竈戸の田糧は、州縣の有司の管轄下にあった。そうであれば、一般民戸と同

様に、里甲の正役は間違いなくかけられてきたのである。

雜役に關しては、鹽課の負擔があることから、免除されるというのが、洪武以來の建前であつたが、無視されることが多く、州縣の均徭の負擔があつたことは、嘉靖三十九年の例をもつて示した通りである。要するに、鹽運司及び布政司による二重收奪を受けていたといふことである。⁽⁴⁵⁾ 王心齋の家は、このような戸役の負擔をまともに引き受けせられる層であつた。生員以上の資格をもつ戸が享授している、雜役の免除という優免權⁽⁴⁶⁾も、手に入れることのできぬ層であつたのである。それはまた王氏にとって、無念なことであつたに違ひない。

しかし、過重な賦役負擔に苦しむのは、王氏のみではなかつた。まさにこの時、明初以來の賦役體制は大きな轉換期に入つていた。矛盾は全國で表面化してきたのである。まず、はるか西南の四川において、大規模な反亂がひき起された。藍廷瑞、鄢本恕等の亂である。⁽⁴⁷⁾

正德三年、湖廣の生員崔逢頭、施州衛軍人張端等八十人の暴徒が四川大寧の鹽場に到達したのをきっかけに、千人餘りの竈丁が蜂起した。リーダー格となつた竈丁鄢本恕は營山縣の人。廖惠（廖麻子）は鄰水縣の人。ともに流民となり、大寧の鹽場に流れこんで鹽丁となつていたものである。彼らは大昌縣をおとし、その戰鬪中に崔を失うと、鄢、廖に率いられ、鄖陽五溪鎮に至り、營山の商人藍廷瑞の参加をみた。鄖陽一帯を舞臺に轉戦するうち、十萬の流民を擁する大軍となり、鄢、廖、藍はそれぞれ王を稱した。その戰鬪は、正德八年、最後に残つた廖惠の部隊が鎮壓されるまで、五年間も續いたのである。その間、これに呼應するかにように、川南の江津でも、曹甫、方四の亂が発生し、その一部は、鄢、廖の軍に合流した。

四川の反亂が續く間、正德五年、河北に勃發したのが有名な劉六・劉七の亂である。⁽⁴⁸⁾ 河南、山西、山東と騎馬の機動力をもつて、縱横に轉戦する流民軍は、官軍の追討をうけ、次第に南下し、正德七年には湖廣に入った。これ以後、馬を棄て舟を操り、長江沿いに掠奪する中、劉六とその子劉仲淮等は水死した。残された劉七と齊彥名等は、長江の水賊を糾合し、江を下つてついに通州の狼山と常熟の福山港に泊り、この間の江面を制壓した。「通（州）、泰（州）、如皋の濱江の區も威な創殘を被

る」と、ここに淮南の鹽場も直接的な被害を受けるに至ったのである。劉七と齊彥名は通州、泰州から上陸し、淮安をぬけ山東へ還ることを謀ったが、結局、官軍に封じ込められた形勢となり、通州への攻撃も撃退され、狼山に敗死し終った。

あたかも全国的な一齊蜂起にさらされたかのように激動する世情は、王心齋の精神をも根底からゆり動かすに至った。正徳六年は、王心齋の思想形成において最も重要な契機となったのである。

先生（心齋）一夕、夢に天墜ち身を壓し、萬人の奔り號して救いを求むるをみる。先生獨り、臂を奮い天を托して起つ。日月列宿の序を失うを見、又手もて自ら整布すること故の如し。萬人歡舞して拜謝し、醒むれば則ち汗の溢ること雨の如し。頓かに心體の洞徹せるを覺ゆ。萬物一體、宇宙は我に在りの念、益ます真切にして已むを容れず。⁽⁴⁹⁾

楊天石氏はこの「天墜」の夢を、劉六、劉七の反亂軍の「龍飛九五、重開混沌之天」というスローガンと對比させ、混沌の天を開かんとする農民軍に對し、失われた秩序を回復せんとする泰州學派の政治目的を象徴するものとしている。⁽⁵⁰⁾ 確かに、王朝をゆるがすこの正徳の農民反亂に終止符をうったのは、王心齋が後に師とあおぐ王陽明であつた。

正徳十二年、巡撫南贛右僉都御史に任ぜられた王陽明は、翌十三年には、七年間も江西一帯に蠢動していた農民反亂を鎮壓しつくす。「諸臣の賊を平らぐるや、遅くして變隨う。新建（王陽明）の賊を平らぐるや、速やかにして賊定まる。」と記されるように、その軍事的手腕は、明一代に雄たるものであつた。のちにその武功によって新建伯の爵位を授けられている。また、王心齋以後、泰州派の異人と目された何心隱も、嘉靖末年、重慶で白蓮教の亂の鎮壓に參畫している。⁽⁵²⁾ 泰州派が、農民反亂に敵對的であることは明白である。

同じく竈丁と規定されても、故郷から離れて流民と化し、流れついた鹽場で燒鹽に従事していたと覺しき鄢、廖の徒と、代々、科派に耐え、それなりに家産を積み、一族の根を地方に張っている王心齋とでは、その社會的立場は判然と分たれる。王心齋にとって、現世はなお維持するに足るものであり、そこでの上昇が期待されるべきものであつたはずだ。とはいえ、當時の王心齋に、階級的な認識のありうるはずもなく、時代の矛盾を直感する鋭敏な精神にとって「萬物一體の仁」の確信は、天

下への責任を一身にひきうけんとする氣慨となり、性急な教化活動への意欲をいやが上にもかきたたいたのである。これ以後の彼は、經書を講説するに自在であり、傳注にとらわれぬ獨特な見解を披瀝していく。

正徳十五年、王陽明は江西南昌に講學していた。江西吉安出身の黃文剛から、陽明と自分の思想の相似を知らされた王心齋は、舟を買い、陽明に會見しようと江西に渡った。南昌の城内では、その古式にのっとった冠服が人の目を引き、「觀る者市道を環繞す。」と最初からすこぶるエピソードにとむ會見であった。布衣ながら王陽明の上座に陣どった王心齋は、陽明との激しい議論應酬の内、次第にその座を下り、遂に陽明に師事することとなった。三十八歳のことである。陽明の死まで、八年ほどの師弟關係であった。

嘉靖元年（一五二二年）には有名な「鯁鯁賦」を作り、冠服、車輪は古の制度そのままという出立ちで、師説をひろめるため、天下に周流しようとして物議をかもす。思想史においてよく知られた事件である。その短絡的と思えるほど率直に實踐を志向する性癖は、本人が眞剣であればあるほど、生粹の士大夫層の感性とはズレを生じていく。陽明が良（止）と命名したのがなにか反語にもみえてくる。しかしこのズレにこそ、王心齋の思想の面目と活力はあったといえよう。

翌年、大きな天災が鹽場を見舞った。正月から六月にかけ、雨が極めて少かったのであるが、七月からはうって變つて長雨となり、堤防が決壊し、田も家屋も漂没してしまった。洪水の鹽場を襲ったのは、人相食む大饑饉であった。冬には疫病が流行し、おびただしい死者をだしたのである。あくる年も早魃となり、饑饉はなお續いた。⁽³⁸⁾この時、王心齋は眞州（儀徵）の王商人より米二千石を借用し、賑濟に務めている。かような非常時における王心齋の働きは、地域における彼の指導力と信用をよく示すものといえよう。

ついでにいえば、嘉靖十四年にも鹽場が大饑饉があった。六月の大旱魃が原因だったのであろう。この時にも王心齋は賑濟を請い、郷里の富者にもすすめていた。これを受け、東臺場永盛團の竈戸盧源は、豆麥一千石を出して施賑したのである。⁽³⁹⁾これを縁に、のちに盧源の子盧榮（例監生）と王心齋の孫娘（王衣の娘）との間に婚姻が成立する。⁽⁴⁰⁾門當戶對^{（い、えのつりあひ）}が當時の婚姻の原則で

あるとすれば、東臺場の富者盧氏に匹敵するだけの實力を、安豐場の王氏も備えてきたということになるう。

嘉靖に入ってから（王陽明門下となつてからのといった方がいかも知れぬ）彼の活動はなかなかめざましいものであり、すでに知識人としてのそれであつた。復初書院、安定書院での講學。泰州出身者を中心に、數十人の門下生が彼のもとに集まるようになったのもこの時期からである。そして、陽明門下として遊學する父親に代つて、家業を管理し、遊學の費用を捻出したのは長子の王衣であつた。⁵⁵⁾

嘉靖十五年（一五三六年）には鹽法御史洪垣に郷約を請われ、また彼の肝煎りで、王心齋の講堂として東淘精舍が建立される。嘉靖十七年には、安豐場の竈戸の所有に不均衡が生じ、業を失う者が多いという、當時の鹽場における最大の懸案について、場官の相談を受け、「均分草蕩議」をものした。これについてはのちに言及する。そして翌々年、嘉靖十九年に五十八歳でその布衣としての生涯をおえたのである。

王心齋が没してから十三年ののち、嘉靖三十二年、王衣を頭に四人の息子達は優免を願う帖文を提出した。

告狀人王衣、王襪、王禔、王補、各年甲同じからざるも、俱に安豐場の竈籍に係る。狀して雜差を優免せられ、以て遊學に便にして、以て先志を承けんことを懇乞せんが事のためにす。……竊かに慮んばかるに、本場の竈總人等は鄙情を諒せず、或は編派差徭の際において、一槩に衣等の名字を以て僉點して官にあり。即ち身を分ち役に應ずる比⁵⁶⁾おい、則ち初志盡く蹶つ。……本名において辨すべき鹽課の外、凡そ丁身に點充するの雜役あらば、優免に與かるを得るを許されよ。⁵⁶⁾

父の死後、その聖道を求める志をうけついで、王衣達は、浙江や江西に師友をもとめて遊學していたのであるが、役にあてられたため、その志も頓挫してしまつて、雜役の優免を訴えてたわけである。この結果がどうであつたのか資料的にはわからないが、王家が雜役の負擔を正式に免れるのはやっと次の代からである。王心齋の孫王之垣、曾孫王元鼎が晴れて生員になつたのである。⁵⁷⁾ こうして、安豐場の王家は、布衣王心齋の講學における名聲を挺子に、ついに名實ともに知識人階層の末端に列することとなつた。

三 鹽場の弟子達

王心齋の門下に最初に集まったのは、族弟王棟を筆頭に、林春、張淳、李珠、陳芑らである。嘉靖五年、王心齋が知泰州王臣（江西南昌人。陽明門下の同學）の招きで安定書院に講學した年、「明哲保身論」を作った年のことである。翌年、王俊、宗部、朱軌、朱怒、殷三聘が門下に入った。以上十人の出身をみると、王俊、殷三聘の二人が江都人であるのを除き、全て泰州人である。嘉靖七年、王陽明が没するが、この年、王心齋のもとにきた、徐樾（波石）張士賢、俞文徳の三人は江西省の出身である。⁽⁵⁸⁾

「王心齋先生弟子師承表」⁽⁵⁹⁾によれば、王心齋に直接師事したもの（一傳の弟子）は、七十九名を数えることができる。（名のみ残っている者を加えれば更に六十九人いるという。）このうち、泰州出身者は四十二名でほぼ半数である。泰州學派ということであれば、まずは當然のことといえよう。次に多いのは江西出身の十五名である。二割弱を占める。ついで安徽出身の六名。外省の中では江西出身が多いのはなぜであろう。

まず考えられることは、王陽明が江西南昌で講學をしていたこと。王心齋も江西におもむいていたことであるが、そもそも陽明門下では、江西すなわち江右王門は一大勢力であった。

泰州學派においても、徐樾（字子直、號波石、嘉靖十一年の進士。雲南左布政使となるが、沅江府の土酋那鑑の反亂にあい戦死。）⁽⁶⁰⁾の系列には、顏山農、何心隱、羅汝芳と江西出身者が續き、それがさらに、廣東の楊起元、浙江の周汝登、南京の焦竑と廣がっていくのであり、泰州學派として名のある人物はほとんどここに集約されている。⁽⁶¹⁾

泰州（王心齋）の後、其人多く能く赤手もて、以て龍蛇を搏たんとす。傳えて顏山農、何心隱一派に至りては、遂に復た名教のよく羈絡する所にあるざるなり。⁽⁶²⁾

黄宗羲がかくいうところの、名教逸脱への思想展開を擔ったのは、他でもない泰州學派の江西グループである。ところが、

その一方で黄宗羲は、江右王門のみが、王陽明の正傳をえ、陽明死後の思想的混亂を正したと評價するのである。⁽⁶³⁾ 皮肉にも、右派も左派も中心は江西出身者というわけで、思想史的には最も興味深い人脈といえよう。

しかし、今は王心齋に直接師事していた、泰州出身の弟子達についてみていきたい。心齋とともに高く評價される王棟は別格として、彼らのほとんどは、『明儒學案』に列せられることもなく、思想的な發明もあるわけではない。とはいえ、彼らが泰州學派形成の中核であったことも事實である。彼らに關し、傳えられていることは少ないが、めぼしいものをあげていこう。

林春 字子仁。號東城。泰州千戶所人。軍籍。嘉靖十一年進士。吏部文選司郎中。家は貧しく、王氏の傭工であつた。聰明さを見込まれ、王氏の子とともに學ぶ。王龍溪の友でもある。四十四歳で死んだ時、銀四兩を残すだけであつた。⁽⁶⁴⁾

王棟 字隆吉。號一菴。泰州姜堰鎮人。民籍。心齋の族弟。嘉靖三十七年歲貢生。訓導、教諭を歴任。白鹿洞、正學書院でも講學。布衣を集めて會を作り、講學化俗に務める。また水東會を創設し、義倉を建て講學した。⁽⁶⁵⁾

陳芑 字實夫。號美齋。泰州千戶所人。歲貢生。河南新鄉縣訓導。心齋の長子王衣の友人。⁽⁶⁶⁾

張淳 字濟化。號此菴。泰州人。嘉靖二十五年舉人。山東范縣知縣。

李珠 字明祥。號天泉。江西より泰州に遷居。胥吏に充てられていたが、知泰州の王臣に事え、學問を聞いたことから胥吏をやめ、心齋の門下となった。その弟李瑤、李璽とともに門下である。

以上五人が、最初に王心齋の門下となった人々である。

宗部 字尙恩。號丸齋。泰州草堰場人。竈籍。監生。南京兵馬司指揮。王心齋に師事し安豐場に寓居していた。⁽⁶⁷⁾ 王心齋は彼の任官に對し「某、吾が丸齋の第一等の人物たることを欲す。惜しいかな。今日これを小用するは我の望むところにあらざるなり」⁽⁶⁸⁾と書を寄せている。兄宗節は曹州吏目。やはり心齋の門に入った。

朱軾 字維實。號平齋。泰州草堰場人。正德十四年舉人。林春とともに會試をうけるが不合格。第一名で合格した林春に従

僕がいなかったので、すすんで代りを務めた。先後七回應試するが、結局合格しなかった。高陽、鹽山二縣に知縣となる。晩年は貧しく、棺を具えることもできず、鹽大使陶悅が葬式を出した。⁽⁶⁹⁾

この宗部と朱軌は、正徳十一年に草堰場の范文正公祠を修復するよう提案し、捐貲している。この時、共に出資したのが宗部の兄の宗節(國子生)及び宗邾、唐滿(生員)であった。⁽⁷⁰⁾

袁株 字子立。號懷堂。泰州草堰場人。龍籍。嘉靖七年舉人。のちの内閣首輔李春芳(興化人)と同學。吉安知府、袁州知府を歴す。

朱恕 字光信。號樂齋。泰州草堰場人。初め字がなかった。自分には平生好い所はないが、唯一、信だけはあるといったので、里人は光信と呼ぶようになった。幼い時から孤貧。樵夫となり、薪を麥に易え暮しをたてていた。心齋の講學を聞くようになってからは、袋に小麥粉を入れ、食事時には河の水でこねて食い、なくなるとまた薪をとりに行った。宗部や袁株が經濟的な援助をしようとしたが受けなかった。⁽⁷¹⁾

この樵夫朱恕及びその學を慕って、心齋の次子王驥(東匡)の門に入った陶工韓貞と、焦竑に師事した安徽繁昌縣の農夫夏廷美の三人が、純然たる庶人學者として『明儒學案』⁽⁷²⁾にも取りあげられていることから、庶民學派としての泰州學派を代表する、いわば看板になっているわけであるが、泰州學派の構成員全體からみた時には、このような貧窮の庶人はむしろまれである。

季宦 字存海。號東洲。泰州安豐場人。若い時から父に従って鹽商をしていた。牙僧から五百金をあずかったところ、盗人にあい、室中のものを全てとられてしまった。別室においてあった預かり金は無事であったので、ただちに返還して欺むことはなかった。やがて、食を謀るは道を謀るにしかずと、心齋に師事した。二人の子供が府學に入ると家産を提供し、學田としている。⁽⁷³⁾

季寅 字存威。泰州安豐場人。季宦の從弟。少年のころから腕力が人にすぐれ、騎射、搏撃を喜んでた。季宦にすすめられ學問を志すようになった。彼は王驥の弟子である。龍居の苦を數首、詩に詠み、鹽官を諷したという。⁽⁷⁴⁾

安豐場の季氏に關しては、季宣の姪季柱も家學をうけついで。下つてその長子季來之は崇禎の舉人。吳嘉紀の友人であつたが、心齋の學に親しんだという。

周盤 字崇壽。號西野。泰州安豐場人。王心齋の妹婿である。聰敏で八歳から詩をよくし、王心齋の門下に入つてからも良知をよく悟り、心齋を感嘆させた。⁽⁷⁶⁾

崔殷 字邦實。號北洋。泰州富安場人。性格は剛毅。若くして心齋の講學を聞き、悟ればすぐ行ふという實踐派であつた。

王心齋は彼を大器として期待した。⁽⁷⁶⁾ 王嬖と最も仲がよく、その子崔希翰は王嬖の女婿となつた。

富安場の崔氏からは、他に崔贊、崔便の名が心齋門下として上つてゐる。崔便については後に言及する。

これらの弟子に加えて、安豐場の王氏からは、心齋の從姪、族姪にあたる王社、王樞、王卿の名が心齋の弟子として上つてゐる。ちなみに王氏の一族について今すこし言及すれば、王嬖に師事した王弘器、王調、王熙、王弘道、王讓は全て王嬖の從兄弟である。さらに十一名の從姪、四名の從姪孫の名も上つてゐる。王嬖にとつては伯父にあたる、王心齋の實弟王錢も、兄の死後、王嬖に師事してゐるのである。

以上、王心齋に直接師事した、泰州出身の弟子達を概観してきた。もちろんここにあげたのはその一部にすぎないのであるが、それなりに氣づいた點をあげてみよう。まず出身鹽場であるが、安豐場が多いのは當然のこととして、中十場の中でも、草堰場、富安場が目につく。富安場は隣接の鹽場であるとして、草堰場との關係がなぜ深いのか今は判然としない。

また入門に際しても、兄弟ぐるみ、親子ぐるみ、あるいは從兄弟がつれだつてという具合に、族單位で所屬してゐることは興味深い。安豐場の王氏が、一族あげて泰州學派にその名を列しているのは、これが王氏の家學であることを示すものであらう。また、富安場の崔氏は、族人に著作の多いところからして、富安場を代表する名族とみられるが、泰州學派の中に多くその名をみかけるのみならず、安豐場の王氏と姻戚關係を結んでゐる。崔氏以外にも、王氏と姻戚關係をもつてゐる氏は、泰州學派にはまみられる。すなわち、鹽場における族的結合のあり方が、そのまま泰州學派の人脈を形成する土臺となつてゐる。

といえよう。あるいは、泰州學派というスクールを媒介として、族的結合が強められているといいかえてもいいだろう。

元來、鹽場は讀書と縁のうすい地域とされてきた。泰州學派の核をなす人々の社會的な地位も、一言でいって、庶民と知識階層の境界といったところである。林春のような進士出身者は他にみあたらない。もっとも泰州學派の中でも、徐波石を筆頭とする江西グループに連なる人脈には、進士出身者はかなりみられる。⁷⁶『明儒學案』にいう泰州學派とは、ほぼこれらの人々を目しているのである。くどいようであるが、今ここに進士出身者がほとんど見られぬといったのは、鹽場出身者に限っているのである。

しかも、進士出身といっても林春の前身は王氏の傭人であつた。母や妻とそら腰をあんで生活したといわれるほど、經濟的には困窮していた人物である。彼以外の人々の資格といえは、舉人、貢生、監生、生員といったところで、王心齋、王襜を始め、生員にすらなっていないものも多かった。そういう意味では、泰州學派＝庶民學派という等式はあやまりではない。そういいながら、先に朱怒、韓貞79の存在をむしろまれだといったのは、王氏にしろ、崔氏にしろ、季氏にしろ、民ではあつても、それなりに家産をもち、子孫からは生員をだしているというように、まさに民と知識階層の境界に立っているからであつて、全くその日暮しというような貧窮者はやはり、まれな存在といわざるを得ない。しかし、彼らを切り捨てることなく、經濟的な援助を申しでても包括していこうとするところに、講學の同志としての連帶の強さを見ることができるところである。

ところで、このようにして、心齋の講學に結集した人々は何を學びとていったのであろう。『懸志』や『鹽法志』の列傳の短い記述の中で、判でおしたように述べられているのが「身體力行」という句である。もちろんこれは、「大學」の格物の實踐、修身の實行をいうのであるが、「萬物一體の仁」という柱が一方にあるとすれば、一個人の内面的修養に止まるわけにはいなくなる。そこで講學活動、教俗化民の精神運動が展開されたわけであるが、かく覺醒された精神が、現實の矛盾に全く無感動でありえたらうか。

四 鹽場の課題

兩淮の地に任官してきたものの中にも、泰州學派に名をつらねるものはいる。揚州同知の周良相（湖廣人）や、知泰州の朱簪（浙江）、泰州同知の林庭樟（福建人）、嘉靖十三年に興化縣知縣となつた傅佩（杭州人）などは、いづれも王心齋に直接師事した地方官である。これら、泰州學派に屬する地方官にとって、その治政は何が課題となつていたのであろうか。

嘉靖十七年、興化縣知縣の傅佩は、興化縣と泰州府の境界を明確にし、均田を行うよう上奏文を提出している。これは當時の泰州における實狀にもよく言及し、興味深いものである。

直隸揚州府高郵州興化縣知縣臣傅佩、謹しみて奏し、疆界を正しくし、糧站を均しくし、欺隱を究め、以て國賦を資け、以て貧民を安んぜんが事のためにす。……本縣（興化縣）地は海濱に僻す。守禦千戸一所を設立す。丁溪、白駒、草堰、劉庄、小海各司鹽場に鄰するに及び、軍竈雜處し、五千餘戸に止まらず。然れども軍は守禦に倚りて民差に當らず。竈は鹽課を待み徭役に任ぜず。俱に各おの、高腴の田地を占買すること萬頃に止まらず。兼ねて以て窘民を逼迫し、文契を捏造し、多く重糧を以て輕糧となし、有站を以て無站となし、甚はだしきは無糧無站の荒草柴場と作爲すに至る。歷年の欺隱は漫として查考するなし。⁽⁸¹⁾

知縣傅佩の目に映つた興化縣の特殊性とは、海岸に近いところから、諸鹽場に隣接し、また千戸所が設けられているため、軍戸、竈戸が雜居していることである。州縣官の立場からすれば、この軍戸、竈戸はそれぞれ軍役と鹽課を負っていることを口實に、州縣の雜役を免れているものである。それが、興化縣内に田地を占有し、しかも無糧、無站の地といつわり、州縣に納めるべき田糧までも隱蔽しているというのである。興化縣周邊の軍戸、竈戸が、縣内に土地を占有するに至つたのは、國初において、この一帯に大規模な遷徙政策⁽⁸²⁾がとられ、田地の所有者が不明になつてしまつたことに起因する。

後に正統、成化等の年間に至り、南は泰州の勢豪大家の越界侵占を被むり……東は丁溪等の鹽場、運鹽河界を跳越し、田地五百餘頃を侵占せられ、竈戸の火伏煎鹽の草場（蕩？）と作爲さる。北は鹽城縣界に抵り、刁惡郝恩等のために二萬餘畝を侵占せらる。累^{しばしば}は業主、上に向かいて理を告するを経るも、卒に併吞せらる。是を以て田は勢家の占種に従い、糧は興化の包賠を累^{おぼ}らはす。歷年既に久しく、民は倒懸に困しみ、逃竄する者將に二千餘戸あり。杖殺せらるる者數百餘人に止まらず。憔悴の極み、未だこの時より甚だしきはあらざるなり。⁸³

泰州の勢豪、豪竈、刁軍により、越境して侵占された田地の稅糧は、その定額がかえって興化縣の民にかけられ、逃散、杖殺といった悲劇を招いているのである。ここに傅珮は、巡撫、按察司、巡鹽使等と會同し、本來の境域を確認し、富豪の侵占した土地は本縣に復歸させて稅糧を納めさせ、軍戸や竈戸の占買した民田は、その畝數を丈量して田糧を公平に負擔させ、寄籍して差にあてること等を建議したのである。

この傅珮の上奏を支持したのが、御史の洪垣であった。王心齋のために東淘精舍を建立した人物である。

洪垣、字峻之。徽州婺源人。督漕御史となる。性明敏にして風節あり。嘉靖十七年、按ずるに、興化呂侯傅珮の均田を奏請するに、豪強阻議する者多し。公、力めてこれを主さどり、親しく各屬官を率い、蚌沿河に詣り、故道を尋ね、その侵疆を辨ず。權豪肅然とす。⁸⁴

彼は、豪強たちの反對をものともせず、實際に現地におもむき檢分したのである。この時、不正の甚だしき者として、槍玉にあげられたのは、泰州の徐蘭、劉春といった人物である。「徐蘭、劉春等の如きは、巨富を號稱するも、しかも冊に在りし糧米は三石の數に及ばず。」⁸⁵といわれていた彼らは、當然抵抗をし、檢地を拒んだのであるが、洪垣らはこの豪民を拘禁し、斷然と處理したのである。

豪民による田地の占有という州縣の問題は、鹽場における豪竈の、草蕩兼併という問題にオーバーラップする。竈戸の生産手段である草蕩は、竈戸の年間のノルマ、十大引（四千斤）の鹽を煎辦するのに、燃料として草二十餘束を用いるものとして、

洪武中、丁ごとに一段を支給した。そこに成育した蘆、葦等の草を自分で砍伐し、煎鹽に用いるのである。⁽⁸⁶⁾ 草蕩は名目上官有地であるから、開墾、典當、承佃、賣買は禁止されていた。にもかかわらず、この草蕩の兼併問題はかなり早くから論議されている。

弘治元年（一四八八年）兩淮御史の史簡が鹽法疏を上奏した。その七項目めが「均草蕩」である。

近者、草蕩の、豪強、軍民、總竈の強を恃みて占種するを被むる者あり。人衆を糾合し、公然と採打し、貨賣する者あり。又、逃移せる竈丁と通同し、荒閑の田土と謬稱し、立約して盜賣する者あり。その出す所の價、甚だ少くして遞年得る所の利、甚だ多し。既に升合の糧をも納めず。而して竈丁の贖を取る者、反つて虛詞假契を被る。積年刁潑の證人を買僱し、有司の貪婪の官吏に賄囑す。以て害を告ぐるを行うも、その有司の官吏は又審査せず。輒ち人を差し勾拏淹禁す。經年屢歲、歸結するを得ず。草蕩日に侵沒せられ、鹽課愈いよ虧兌を加う。⁽⁸⁷⁾

ここに述べられた草蕩の占種、貨賣、盜賣といった事態に對し、考えられた對策は、罪を免ずるかわりに、官に草蕩を返還させるというものであった。なんの効果もないものであったことは、以後もひき續き、草蕩の問題が提出されていることから伺えよう。嘉靖四年、兩淮御史張珩の禁約にも、草蕩を清查することの一項がある。⁽⁸⁸⁾ この禁約からも、草蕩が質入れされ賣り拂われ、あるいは侵占され不明になっている現状がわかるのであるが、その對策は、檢地を行い原主に返還させ、清冊を作るといふものである。

ただ、嘉靖の初期からは、草蕩を清理しようという動きが、他ならぬ鹽場に籍をおくものからでてきていることに注目しよう。

富安の崔便是十場の草蕩を清理す。角斜の潘道光は本場の草蕩二千五百畝を清理す。又何梁の何良、朱瑾皆に本場の草蕩を清理するの事あり。⁽⁸⁹⁾

ここにいう崔便是、崔殷とともに王心齋に師事した富安場の崔氏である。安豐場の王氏とは姻戚關係もあることは既に指摘

した。崔便の記事は『東臺縣志』にもみられる。

崔便是富安の人なり。時に十場の草蕩均しからず。多く兼并する所なり。便ち當事に力請し、これを清釐す。⁽⁹⁰⁾
又いう。

王辰は安豐の人なり。本場の草蕩は、舊疆、梁梁の侵す所となる。これを有司に訴え、悉ごとくその舊に循うを得。⁽⁹¹⁾

ところで、王辰の孫の王嘉令は、嘉靖の間、潮害にあった角斜場の鹽課を安豐場が肩代りし、それが五十年あまりも續いていたのを訴え、始めて免ずることができたという。孤貧であったのが、數十年にして巨萬の富を積んだというこの王嘉令は安豐場の鉅族であった。⁽⁹²⁾王辰、王嘉令とも、泰州學派には列せられていないし、王心齋との族的なつながりも明記されていない。しかし、王辰は、王心齋の子、王衣、王襪、王提らと同じく衣の字を名に含んでいるし、王嘉令に關しても、王心齋の曾孫王嘉第と嘉の字を同じくしている。王氏の一族であることは間違いないだろう。

以上、いくつか鹽場の人間による草蕩清理の例をあげたが、これらに先がけて、王心齋自身が、草蕩の問題と深くかかわっていた。彼は嘉靖十七年「均分草蕩議」⁽⁹³⁾を提出している。

是故に、草蕩を均分するには、必らず先に經界を定めん。經界定めあれば則ち坐落分明なり。上に冊あり、下に票を給す。上に圖あり、下は業を守る。後に日久しと雖も再び紊亂する無し。……本場五十總、每總一里を丈量す。每里方五百四十畝を以て區と爲す。内に糧田、官地等の項を除き、共に若干頃畝を計る。本場一千五百餘丁、每丁分該若干頃畝。各原産の草蕩、灰場、住基、竈基、糧田、墳墓等地に隨ひ十段、二十段四散するに拘らず、某里某區内に坐落し、印信、紙票を給與し、書寫明白にして、本總本區頭に着落し、立てて界埠を定め、明白にその業を受けしむれば、後に逃亡事故に遇ふも、票に隨ひて業を受く。千萬年の久しきと雖も再び紊亂する無し。

ここに王心齋が強調することは丈量である。經界を明白に定め、清冊や給票により所有の根據を確實にすることに他ならない。しかもこの丈量の提議にあたつて本場一千五百餘丁の、丁分というものが考慮されている。丈量の目ざすものは、その所

有にみあつた、應分の賦役の負擔であつたろう。「均分草蕩」はまさに均田均役と軌を同じくするものであつた。

鹽場において泰州學派の直面した政治課題とは、以上みてきたように、豪強、豪竈といわれる層の兼併、侵占の行爲をチェックすることであつた。彼ら自身、庶民と優免の知識人層とのいわば接點に位置することにより、賦役負擔の不平等には人一倍敏感にならざるを得ない層であつた。かくして兼併行爲のチェックは、自らの階層利害と合致するものであつたが、同時にそれは、單なる階層利害の追求に止まらぬ、土着としての責任感に裏づけされたものでもあつた。泰州學派が、同族的な結合を下地としているスクールである以上、鹽場という地域社會の保全をはからずには存しえまいし、また地域への責任を主體的に擔わんとするだけの自信も、有産者、生産者としての彼らは持ちあわせていたのである。

最後に、この草蕩兼併のもつ意味を含め、鹽場の生産關係を今少し考察してしめくりしよう。

むすび

鹽場における竈戸の階層分化は、早くから爲政者の目につくことであつた。正統元年の曹弘の「禁私販疏」⁽³⁾には、わずか五斤、十斤の私鹽を近隣の鄉村にもちこみ、食糧と交換し家口を養おうとしても、禁制の前にそれすらまなならず、他郷に流入する貧竈がいる反面、家人を使つて大船を仕立て、二百引、三百引もの私鹽を引きうけていく江南の富豪、糧長を取引き相手にしている頑民、大戸と呼ばれる竈戸の存在が對比的に記されている。このように太い私鹽ルート⁽⁴⁾の形成は、元末以來の鹽場の社會關係が、そのまま持ちこされてきてのことであろう。この階層分化は、時代をおって激化していく一方であつた。ことは單なる貧富の差に止まらず、生産手段の占有化を招き、富竈＝有産の製鹽業者と、傭工化した貧竈の二極化を現象しつづつたのである。先に言及した草蕩の兼併化も、この意味で深刻な問題であつた。

生産手段の占有化は草蕩に止まらず、より直接的な生産用具である鐵盤、鍋鏝にも及んでいる。弘治元年の史簡の「鹽法疏」

には次のようにいう。

富安等の鹽場の盤鐵はみな、洪武、永樂中に鑄造されたもので、長年の間に破壊してしまい、何度か修理を上奏しても、未だにきかれない。旺煎期には各竈戸が輪煎することになっているが、富豪が（盤鐵を）獨占してしまい、貧竈は煎鹽しようがない。たまに自前で鍋鏝を置こうとすると、人から恐嚇される。勞働力はあつても器具がないのである。⁽⁹⁷⁾

明初の規定である團煎が、すでに弘治の時期に機能していないことがよくわかる。官給の鍋盤は、破損しても修理されず、輪煎することになっていても、豪強が占有してしまっている。自前で小さい鍋を設置しようとすれば、私鹽にあたるとして人からおどされるのである。

さらに下って、嘉靖六年の戴金の「鹽法疏」でも事態はほとんど變らない。

立法の初めは鐵盤を鼓鑄し、竈戸に團煎させることになっていた。……（鐵盤は）年を経て、破損するものが日に多くなっている。富豪は私に鍋鏝を設置し、定額以上の煎鹽生産している。貧難のものはどうしようもなく、逃散するものが相繼いでいる。⁽⁹⁸⁾

さすがに時代の流れを思わせるものは、富豪が官給の鐵盤の占有からすすんで、自ら鍋鏝を設置していることである。鹽場で使用される煎鹽の鍋も、鐵盤から鍋鏝へと主流が變ってきているのである。

嘉靖三十年には、富竈と商人が合謀し、損壞した舊盤の修理を官に願うにあたり、鍋鏝の有利な點をとぎ、鐵盤から鍋鏝に切り變えさせている。さらに富竈は經紀と合謀し、鎮江に住む鐵匠を移住させ、白塔河に作業場を開設し、鑄造させるという許可も官からとりつけ、ますます鍋鏝を増設していったのである。⁽⁹⁹⁾ 富竈は家に十數個もの鍋を私有し、草蕩を兼併し、貧竈はその義男、女婿という名目で、傭工になり下るといふ形で私的な大規模經營がここに現出しているのである。「富は王侯に敵う^{かな}」といわれるほどの豪竈もその中からは生れていた。

ただ、このように鹽場において、竈戸の二極化がすすむといっても、個々の事例をみると、王心齋や王嘉令のように、一代

で富を積むものもあり、その反面、次の詩に詠われているような落魄の元富寵もあったであろう。

海風野草望無邊 海風野草にふき望むに邊なし

幾樹枯楊一破椽 幾ばくかの枯楊、一破椽

赤脚老翁原富寵 赤脚の老翁は原の富寵なり

自言遭水十三年^(四) 自ら言へり水に遭ひて十三年と

專賣制度と表裏をなして、私鹽が大きなマーケットとしてある以上、個人の才覺にものをいわせる餘地は充分あったであろうし、范公隄の外側に住む竈戸にとって、洪水により一切を消失するという恐れもまた現實のものであったのだ。かくしてその内部はかなり流動的であったといえよう。

しかしながら、生産手段の占有化から生じる貧寵の逃亡、流民化という現實は、安定した鹽課収入を目ろむ王朝權力にとっても、鹽場の保全を願う在地の有産者にとっても、願わしいことではなかった。四川でおきた竈丁の反亂、鹽場までまきこまれた劉六劉七の亂、ともに生々しい記憶であった。

正徳十年、御史藍章が團煎の法を復活することを上奏している^(四)。藍章はこれより先、正徳六年に陝西巡撫都御史として、陝西の兵を率い、四川の竈丁藍廷瑞、鄢本恕の亂の鎮壓に参加している^(四)。彼の團煎復活の建議に、治安の意味がなかったとはいえない。そして王心齋の「萬物一體の仁」も、正徳の農民反亂に直接誘發されたものであった。

正徳、嘉靖期は明王朝の經濟構造が大きく變換しようとしていた時期である。この變換期に鹽場にあつて「明哲保身」をいい、身を愛することを修身の内容として風俗教化をはかり、族的結合を媒介に、鹽場の保全に意を注いでいた泰州學派が、現實の矛盾に直面しては、豪民、豪寵の兼併をチェックしようとしたことは當然のことであつた。それは全國的な、賦役體制の不均衡を再編成しようという氣運とも軌を同じくするはすのものであつた。江西グループの何心隱にしても、冤罪をもって出奔する以前、郷里において試みていたことは、賦役負擔の相互扶助をも含んだ、宗族の教化である。その罪におとされた原因

も、不當な税負擔を拒否したことにあった。⁽¹⁰⁾ このようにみるならば、地域社會に根づいた改良者としての泰州學派の基層性格は、一層明確であろう。⁽¹⁰⁾ その講學活動につきまとう強烈な天下への傳道意識が、後に處士横議として處斷されるという現象を一方に生んだとしても、本來、心學の持つ郷土保全への教化作用は、地方官のよく容認するところであつたのである。⁽¹⁰⁾

注

- (1) 嘉慶『東臺縣志』卷八 都里。布衣ながら吳嘉紀の詩人としての名聲は高く、著書に『陋軒詩』がある。字骨實。號野人。
- (2) 康熙『兩淮鹽法志』卷二十七 藝文三 吳處士傳。
- (3) 『同右』卷二十八 詩。
- (4) 島田虔次『中國における近代思惟の挫折』
- (5) 拙稿『何心隱論』『史林』六十卷 五號。
- (6) 稻文甫『左派王學』においては王龍谿、王心齋を王學左派の二大領袖とし、泰州學派を王學の極左派とする。
- (7) 侯外廬編『中國思想通史』卷四下。
- (8) 『同右』九七二頁。ここでは、王心齋が、王陽明に師事する以前から、その思想形成を獨自に行つたことを強調し、王陽明と泰州學派を切り離す意圖をもって、黃宗羲が援用されている。
- (9) 同様な關心からの先行論文として大久保英子「泰州學派とその社會的基礎」(『東洋史學論集第三 一九四五年』)がある。
- (10) 『東臺縣志』卷十一 水利下 隄圩。范公隄に關しては記、詩などそれを素材にしたものは多い。唐の大曆元年(七六六年)、李承が淮南節度判官に任じ、楚の鹽城より揚の海陵まで築堰したのが始まり。宋の開寶中、王文佑が増修したのは、放置されたままであつたのを、范仲淹が興化知縣に任じ、その修工にあたつた。天聖六年(一〇二八年)、四年の歳月を費やして百四十三里の隄が完成。
- (11) 康熙『中十場誌』卷二 疆域 安豐場。ちなみに、安豐場は東西七十五里、南北十四里とされている。『東臺縣志』卷八 疆域)
- (12) 『重鐫心齋王先生全集』卷一 安豐場圖。心齋故宅圖。心齋墓圖。以下『全集』と略稱す。ちなみに本論文に使用したものは萬曆四十四年序四代孫元鼎補刊本であり、内閣文庫所藏のものである。『東臺縣志』卷三十四 古蹟 冢墓。
- (13) 『全集』卷二 世系源流截畧。系譜に關しては以下これによる。なお、王良の家系については寺田隆信「王良の家系について」『加賀博士退官記念中國文史哲學論集』に詳細な紹介がある。寺田氏は王氏の泰州への移住を一三〇〇年前後と推測されるが、今は「世系源流」の記載に従う。
- (14) 康熙『兩淮鹽法志』卷十五 風俗 灶俗。
- (15) 『明儒王心齋先生遺集』「王一菴先生遺集」年譜。
- (16) 明代の鹽場に關しては、藤井宏「明代鹽場の研究」上、下『北海道大學文學部紀要』一、三。佐伯富「明代における灶戸について」『東洋史研究』四十三卷 四號。
- (17) 『中十場志』卷二 疆域 安豐場。
- (18) 『東臺縣志』卷三十二 列女上 守貞孝女。
- (19) 『中十場志』卷一 建置 鹽課司。
- (20) 王毓銓『明代的軍屯』二二八頁。
- (21) 『東臺縣志』卷二十一 忠節。
- (22) 萬曆『興化縣志』卷二 疆域 知縣傅公瓚疆界議。
- (23) 『東臺縣志』卷二十二 孝友。吳汝寧。安豐人。洪武中。兄汝陽。以養權鹽法事。株連雲南烏撒衛。……七世孫嘉紀……。嚴密に言えば、吳汝陽の弟、吳汝寧が吳嘉紀の祖。

- (24) 『東臺縣志』卷二十七 尙義。
 (25) 『同右』卷三十六 藝文。
 (26) 『同右』卷四十 雜記。
 (27) 『同右』卷二十六 篤行。
 (28) 『全集』「別傳類編」卷下 館課傳 其四 編修許辦。
 (29) 『東臺縣志』卷三十二 列女上 賢婦。
 (30) 『同右』卷十五 風俗。
 (31) 『明經世文編』卷一八七 霍韜 鹽政疏。
 (32) 『中十場志』卷一 風俗。
 (33) 『同右』卷一 食貨。
 (34) 『全集』卷二 年譜。以下の記述もこれによる。
 (35) 李二曲『觀感錄』心齋王先生鹽丁。場俗業鹽。不事詩書。以故先生不知書。惟以販鹽爲務。年近三十。同鄉人販鹽山東。
 (36) 萬曆『大明會典』卷三十四 鹽法三 鹽法通例。
 (37) 『同右』卷三十二 鹽法一 山東。
 (38) 『東臺縣志』卷七 祥異。以下天災の記述はこれによる。
 (39) 『全集』卷二 年譜。
 (40) 藤井宏「明代鹽場の研究」下 第三章 灶戸の差役。
 (41) 『中十場志』卷四 賦役。貢課については次のようなものがあがっている。
 孝陵神宮監鹽 三五〇〇斤
 內府供應庫鹽 二〇〇〇〇斤
 南京孝陵寺鹽 一八〇〇〇斤
 菜臺鹽 二〇〇〇斤
 抱國鮓魚鹽 六二一三斤
 計 四九七一三斤
 十場とも同数が課せられた。各場三十年輪解。
 (42) (43) 『同右』卷四 賦役 工脚。有明洪武元年額設工脚、各場除先年投充灶戸外、十戸一丁、奉旨由帖、在場扛擡引鹽、看守倉庫。
 (44) 『同右』卷二 疆域 角斜場。
 (45) 灶戸が運司と布政司の双方から、二重支配をうけているということに關しては、前掲藤井論文に詳しい。また『中十場誌』卷四 賦役田糧には次のようにいう。「以上田糧は前朝正統以前、俱に有司において辦納す。景泰四年、兩淮運使蘇肄奏すらく。灶戸の田糧を將て餘鹽を折納す。糧一石毎に小引鹽一引を折すと。成化八年、泰州分公司柴秀奏すらく。灶戸の折鹽の田糧を將て仍ち有司に復さん。」灶戸の田糧に關しても、運司と州縣官の間で管轄を争っているのがわかる。
 (46) 『鹽政志』卷十 禁約。嘉靖四年、兩淮御史張珩の禁約内の優免則例によれば、優免されるのは、見任官、以禮致仕官、舉人、監生、曾經科舉生員であり、「其附學未經科舉者」は優免されない。
 (47) 『明史紀事本末』卷四十六 平蜀盜。なお、藍廷瑞、鄒本恕、廖惠らの出身に關しては、唐光沛「明正德年間四川大字灶夫領導的起义」『井鹽史通訊』一九七九年一期。張學君、冉光榮「明清四川井鹽史稿」第二章 大字灶夫鄒本恕等人領導的起义斗争等の研究による。これらの論文においては、この正德年間の灶夫の反亂は、實質上荆襄の亂の繼續であるとする。
 (48) 『明史紀事本末』卷四十五 平河北盜。西村元照「劉六劉七の亂について」『東洋史研究』三十二卷 四號。
 (49) 『全集』卷二 年譜。
 (50) 楊天石『泰州學派』五頁。
 (51) 『明史紀事本末』卷四十八 平南贛盜。
 (52) 前掲拙稿「何心隱論」
 (53) 『東臺縣志』卷七 祥異。
 (54) 『東臺縣志』卷二十七 尙義。盧源。永盛團人。正統二年。輸穀千石賑饑民……又捐麥千五百石。仍設厰三官殿。招各灶饑民人。日給米一升。……又賑米數千石。彼はこのようにたびたび賑災行爲をしている。ちなみに東臺場の團としては、永盛團、餘慶團、利用團、

- 豐盈園、大益園、廣儲園がある〔中十場誌〕卷二 疆域 東臺場〕
 (55) 『全集』卷二 世系。
 (56) 『全集』卷五 優免帖文。
 (57) 王之垣と王元鼎の二代にわたって王家の族譜、すなわち『大儒族譜』十二巻が完成された。王元鼎は陳履祥に師事。また家廟、義塾などを整えた。二人は『心齋全集』『心齋遺集』の出版にも盡力している。王之垣の傳は『東臺縣志』卷二十六 篤行に、王元鼎の傳は同じく『東臺縣志』卷二十四 儒林にみられる。
 (58) 『全集』卷二 年譜。
 (59) 『明儒王心齋先生遺集』内「王心齋先生弟子師承表」二卷 以下「師承表」と略稱す。
 (60) 『明儒學案』卷三十二 泰州學案一。
 (61) 「師承表」によれば江西グループの關係は次の通りである。
 (江西進士) (江西布衣) 羅 汝 芳 楊起元(廣東進士)
 徐 樾 顏 山 農 (江西布衣) 周汝登(浙江進士)
 何 心 隱 焦 竑(南京進士)
 (62) 『明儒學案』卷三十二 泰州學案序。
 (63) 『同右』卷十六 江右王門學案序。
 (64) 『國朝獻徵錄』卷二十六 吏部三 吏部郎中林東城春墓志銘。
 (65) 『明儒學案』卷三十二 泰州學案一 銓部林東城先生春。
 (66) 『心齋先生遺集』「王一卷先生遺集」年譜。
 (67) 「師承表」以後、弟子の傳で特記しないものはこの「師承表」の記事による。
 (68) 『東臺縣志』卷三十 流寓。
 (69) 『全集』卷四 答宗尙思。
 (70) 『東臺縣志』卷三十 流寓。
 (71) 『同右』卷三十六 藝文 草堰范文正公祠記 楊果。
 『兩淮鹽法志』卷十九 理學。

鹽場の泰州學派

- (72) 『明儒學案』卷三十二 泰州學案一 樵夫朱恕 陶匠韓樂吾 田夫夏叟。
 (73) 『兩淮鹽法志』卷十九 理學。
 (74) (75) (76) 『東臺縣志』卷二十四 儒林。
 (77) 『同右』卷三十九 選述 富安崔氏の著述として、崔殷「漁舍遺響」、崔弟「鹿野集」崔三錫「崔氏遺稿」等があがっている。
 (78) 注(4)参照。
 (79) 『觀感錄』韓樂告 この傳には「蒲を買い鹽囊を織らしめ糲に易え以て朝夕に給す。」と、韓がその妻に鹽袋を作らせて生活していたことがかかれてゐる。鹽場における副業としておもしろい記事である。いずれも「師承表」にみられる。『全集』卷五 門弟子姓氏には、この四人が宦遊維揚門人として分類されている。
 (80) 康熙「興化縣志」卷三 詳文 知縣傳公均田本。
 (81) 本文第一章に既出の、蔡玄等鹽徒五百戸、東南の民三百戸の遷徙事件をさす。
 (82) 注(2)参照。
 (83) 萬曆「興化縣志」卷五 名宦列傳。「明史」卷二百八にも洪垣の傳はある。
 (84) 萬曆「興化縣志」卷二 疆域 知縣傳公珮疆界議。
 (85) 『鹽政志』卷七 疏議下 史簡鹽法疏。
 (86) 『同右』また同治「兩淮鹽法志」卷二 古今鹽議錄要上。
 (87) 『鹽政志』卷十 禁約 張珩禁約。
 (88) 康熙「兩淮鹽法志」卷四十四 人物二 才略。
 (89) (90) (91) 『東臺縣志』卷二十七 尙義。
 (92) 安鹽場にかかってきた、角斜場の代辦額は、九百八十四引であった。〔中十場誌〕卷四 賦役 同じく「中十場誌」卷六 篤行の王嘉令の傳内には、一千七十一引とある。
 (93) 『東臺縣志』卷二十六 篤行。
 (94) 『全集』卷四 ここに引用したのは、全集に收録されているほぼ全

文である。しかしこれが果して本来の「均分草蕩議」の完全な姿か
いささか疑問の残る文である。

(95) 『鹽政志』卷七 疏議下。

(96) 『兩淮鹽法志』卷十八 土產。每歲三四五六月地氣上升。瀘液騰湧。
產鹽爲多。謂之旺煎月。

(99) 『明經世文編』卷三五七 龐尙鵬「清理鹽法疏」

(100) 『鹽政志』卷十 禁約 嘉靖七年李佑禁約。二曰招撫逃灶。各場灶
戶。近年凶荒。逃亡頗多。見在者。加以豪強侵害凌虐。或將親子改
名。投入富戶。爲義男女壻。以致鹽課不得完徵。

(101) 『兩淮鹽法志』卷二十八 詩 姑蘇 陳翼「七家園」。

『東臺縣志』
卷八 都里では「戚家園」と題されている。

(102) 『兩淮鹽法志』卷二十八 沿革。

(103) 『明史紀事本末』卷四十六 平蜀盜。

(104) 前掲拙稿「何心隱論」

(105) 濱島敦俊「均役の實施をめぐって」『東洋史研究』三十三卷 三號。

ここには、下級讀書人を含む、非身分制地主による均田均役の改革
が述べられ、王學左派、東林系などとの關連にも言及され興味深い。

(106) 隆慶三年、興化縣は大水で田廬が水没し、人心大いに亂れた。知縣
李對泉はこれを憂え泰州學派の韓樂吾に災民の教化を願った。韓は
門人をつれ小舟をしたて村落をまわり、詩を作つて戸ごとに諭した。

貧に安んじた顔子、餓死した伯夷、叔齊を引いて、短慮をいましめ
た彼の教化は效を奏し、妻子を賣るほどの苦境であつてもついに村
に騷亂は生じなかつたという。『樂吾韓先生遺稿』

『樂吾韓先生遺事』
(臺灣國立圖書館藏)